

日本名婦伝

大楠公夫人

吉川英治

青空文庫

木も草も枯れ果てて、河内かわちの野は、霜の白さばかりが目しに沁しみみる。

世は戦いくさに次ぐ戦であつた。建武けんむの平和もつかの間でしかなかつた。楠木くすのき正成まささしげ、弟正氏まさうじたち一族おびただの夥しい戦死が聞えた後も、乱は熄やまなかつた。山は燃え、河はさけび、この辺りを中心として、楠氏なんしの軍と、足利あしかが勢ぜいとの激戦は、繰返され繰返されて、人皆が、冬野の白い枯木立のように、白骨となり終らなければ熄やまないかに思われた。

「……何として近づこう」

ひとり野を歩いて行く男は考えていた。

足利方の大将山名時氏やまなときうじの家来で、漆間蔵六うるしまぞうという者だった。

蔵六の顎にも霜が生えていた。五十がらみの武者である。

蔵六はしかし武者いでたちはしていない。薬売りの持つ旅つづ

ら一つ担になつて、それに似合う下人げにんの脛はぎあて当を着け、野太刀ひと腰

さしていた。

「おや。……輿こしが行くぞ。女にょにん人のお輿らしいが」

冬木立の間を駈けぬけ、遽にわかに、野の一すじ道へ急ぎ出した。

彼が、大声して、手を振ったので、先に行く輿は、

「何者？」

と、止まったが、同時に、それを守る七名ばかりの郎党は、怪しみの眼をそろえて、ながまき長巻刀を向けたり、弓に矢をつがえかけたりした。

藏六は、次にまた、怪しい者でない由を呶鳴り立てた。みやこ京都で聞えているくすし薬師の店の主だあるじと云った。妙心寺のお書付も所持しているし、じゅおうおしょう授翁和尚もよく存じ上げている。自分の家法とするきんそう金創の名薬は、以前、その授翁様を通じて、さき前に討死遊ほめばした正成様の御陣へもさしあげて、お賞にあずかったことがあると云った。

「して、その薬師が、この戦場へ何しに、また何用で、われらを呼びとめたか」

輿の従者たちが咎め返すと、蔵六は、家法の陣中藥を、東条の城へ献納のために来たと答え、洛内らくないの商民である自分らとしては、せめてこういうことでもするしか、朝廷への御奉公の道はないので——などと云い足した。

「いかがしたものでしょうか」

従者のひとり、輿の内なる若い女性に伺っていた。蔵六のこ
とばを民草のしおらしい真心と聞いたか、臈ろうたけた声音こわねの主は、
計ろうてとらせてやるがよいと、内で云った。

千早、ちはや 金剛山こんごうせんは云わずもがなである。この辺はどんな小山も窪地くぼちも、柵さくや寨とりででないところはない。

だが蔵六は、折ふし途中で会った内侍ないしの供に加わつて来たので、難なく要塞の本拠まで入れた。後で聞けば、輿こしの上じょうろう 藤は、吉野の仮宮に仕える内侍所の女性で、何かのお使いで東条の城へ見えたと途中であつたという。

正成の戦死して後、ここは楠氏ほんじょうちの本城地であつた。十八郷の勤皇の将士の多くは、正成と共に湊川で殉じたが、なお孤塁には三千の忠精があつた。巖いわおのような結束があつた。

「——だが、屈強な者は、目立つて滅へつてゐるな」

蔵六は、そう観た。

彼が、入り込んだのは、正^{しょうへい}平二年、足利勢の細川^{ひょうぶだゆ}兵部大輔^うや山名時氏の軍が、脆^{もろ}くも年少の大將楠木正行のために、一敗地にまみれて敗走したすぐ後のことだった。

で、ここには今、戦捷の意氣^{みなぎ}が漲^{みなぎ}っていた。山名細川の首も近く見ようぞ。春ともなれば、尊^{たかうじ}氏の首級を、京に梟^かけて、神璽^{しんじ}を奉じ、主上の還幸をお願いし奉ろうぞ。そうみな希望にかがやいていた。

けれど、蔵六の眼で見れば、その人々の信念にただ驚くばかりであつた。彼が仕えている足利の軍隊からみれば、兵数は勿論、兵器、食糧、装備の諸具、欠乏を告げていない物はない。

農倉^{ひさあわ}の稗粟^{ひさあわ}は云うまでもなく、畑^{ふるい}の物も土を篩^{ふるい}にかけたように

喰べ尽している。龍泉寺の樹々も、ここの草木も、焚物^{たきもの}として
 焚き尽し、立っているのは、風雨に黒くよごれた幾十旒^{りゅう}かの菊水
 の旗ばかりであつた。

わけてもここで欠乏して困っているのは、病舎にいるたくさん
 な負傷者に用いる陣中薬であろう。そう察して、蔵六が、献上と
 称して持つて来た物は、案のじよう、

「よくぞ」

とばかり寨^{とりで}の人々に飲ばれた。

各所の小合戦は絶え間ないし、傷者は殖えるばかりだし、それ
 にまた、蔵六が、薬師^{くすし}というので、

「御奉公のため、働きたいというか。殊^{しゅしやう}勝^{しょう}なことである」

と、そのまま、城寨じょうさいのうちにいることも許された。

「しめた。ここまで事が運べば」

蔵六は、目的に向つて、徐々に眼を光らし始めた。

三

漆間うるしま小四郎こ綱高つなたかは、こんど十七歳での出陣だった。初陣ではなく、何度かの合戦で、いつも敵の強豪を打ち、足利勢のうちでも、

「小綱こつなは、一の武者よ。親まさり、主まさりよ」
と、褒められ者であつた。

その小綱は、漆間蔵六の子息であつた。自慢息子なのである。

男の子三人のうちの次男であつた。

ところが、この秋、浪華^{なにわ}附近の激戦の折、乱軍の中で、楠木^{ぜい}勢の手に、捕虜^{ほりよ}になつたと伝えられた。

「よもや、彼が」

親の欲目のみではない。彼の主人山名時氏も、戦死であらうと思つていたところ、その後、やはり楠木氏の捕虜になつたが、逃げ歸つて来たという者のはなしによると、

「小綱は、敵方の東条に生きている。しかも、楠木一族へ、忠誠を誓つて、助かっている」

とのことだつた。

それはかなり確實そうな消息だったので、山名時氏は、小四郎綱高を憎む前に、親の漆間蔵六に、

「ていよく子を渡して、敵へ内通しておるのではないかと、疑いの目を向けた。

次の合戦には、漆間蔵六も、小綱の兄や従兄弟たちも、戦士の籍から除外されていた。

蔵六は、侍の最大な不名誉「嗤さむらいわれ者」の汚名を、どうして拭おうかを、必死で考えたあげく、

「そうだ。小綱の首を切つて来て、一門の潔白を示そう。また、小綱に考えがあつてのことなら、力を協せて、敵地の子を救い、共に脱走して京都へ帰ろう」

と決心して来たものであつた。

四

十二月の二十日頃である。

正^{しょうへい}平二年の歳^{とし}も押しつまつてきたが、戦雲はいよいよけわ

しい。正行が陣頭に立つてから、前後二度の大戦に敗れた尊^{たかうじ}氏は、それまでに味方のうちに、

——多^{たもんひ}門兵衛正成^{しょうせい}が再来よ。

と、正行を怖るる声があつても、何の、まだ弱冠の小児がと、
見くびっていたが、ここ敗報しきりとなつて、ようやく、

「これは、嫩葉ふたばのうちに、摘つんでおかぬと」

と、遽にわかに大規模な作戦を立て、高師直こうのもろなお、師泰もろやすを総帥そうすいと

する、二十余カ国の兵六万をもつて、東条、赤坂の攻略に大挙さしむけた。

十六、七日の頃には、もう中河内の平野には、その前哨戦さかんが旺となつた。

こえて二十一日の夜半。

前線にあつた河内守正行かわちのかみまさつらと、弟大和守正時やまとのかみまさときとは、東条

の本城へ一度引揚げて来た様子である。

牛頭山医王院ごずさんいおういんの大伽藍だいがらんでは、正行、正時を中心として、一族

の楠木将監くすのきしょうげん、和田新発意しんぼち、舍弟新兵衛、同紀六左衛門の子ら、

野田四郎とその子ら、せきじりようえん関地良円などが、翌日も、翌々日も、

軍議であつた。

正行、正時の弟、三男の正儀まさのりも端はしにいた。

朝廷の親衛軍しんえいぐん、興良親王おきながの御陣地や、四条隆資じょうたかすけのほうへ

も、いちいち軍議が報じられ、また、御意見をうかがい、使者が走るといふ有様だつた。

「はて。どこにも見えぬ」

蔵六は、こういう折こそ、捕虜のわが子をさがす屈強な時であると思つて、出入りする将兵の顔は勿論、小者こものや百姓たちの屯たむろ、またはどこか幽閉されていそうな牢舎、穀倉、薪小屋までさがしたが、わが子とは限らず、捕虜らしい者は見えなかつた。

そのうち城内の混雑はいよいよ加わり、天王寺や八尾あたりに布陣していた人数も、一度皆、引揚げて来た。

するとまた、その人数の大部分、およそ二千余騎の兵が、一樣に城寨とりでから出払って、急に、東条、龍泉寺りゅうせんじ、赤坂の一带が、人まばらになったのを見た朝のことである。

城寨とりでの山、東条の麓にある龍泉寺の医王院いおういんの広苑ひろにわに、いっになく、鮮やかな菊水の旗と、遠目にも眼を射らるるような卯の花、緋、萌黄もえぎ緋おどしなどの鎧、太刀たち、艶やかな塗弓ぬりゆみ、長巻刀ながまきなどの揃い立つた一群の兵馬が見下ろされた。

「あ……。正行、正時の兄弟だな。さては、いよいよ今朝、必死の出陣とみえる」

山の中腹にある病舎の軒下から、唯そう感じただけで眺めていた蔵六は、そのうちに躍り上がるほど驚いた。わが子の小四郎綱つなたか高の姿を、偶然、その群れの近くに見たからであつた。

五

列の左の端を頭に――

ことし二十三歳の正行。ことし二十一歳の大和守正時。ことし十九の三男正儀。

順にならんで、以下、一族の者十数名も整然と、立ち並んでいた。

「……………」

「……………」

声もない。だが、言葉にまさるものが、人々の面には澄み切つていた。

正行以下、列の人々は、今、出陣の別離を告げていたのであつた。その列を前に、戦住居いくさずまいの伽藍がらんをうしろに、故楠木判官くすのきほうがん正成さしげの妻、未亡人の久子ひさこは、相對して立つていた。

その年、久子は、もう四十のうえであつた。

けれど、二十歳はたちの年の暮——ちようど今頃の冬、ここから近い甘南備かんなびの郷さと、南江みなみえの生家から、土地の名族楠木家に嫁かしてから、正成とのあいだに、六人の男子を生なしてきようまでに至る間、片

時も心のたゆむ間とてなかった故せいであろうか、その毛髪くしには一すじの霜もなかった。皮膚はほの赤く緊しまり、田舎人のように少し肥えてすらあつた。

衣服もここらの在所の女房たちが着る粗末な物と変らないのを纏まとつていた。裾すそ短みじかに括くくっている山繭やままゆの腰帶もそれも自身の手織りなのである。

戦場の寺住居ではあつたが、空地には、桑畑もあり機屋はたやもあつた。それを染める染瓶そめがめも備えてあつた。将士の家族や百姓の女房たちに教えて、ここの兵站部へいたんぶでは、平常、衣食住あらゆる物を自給自足していた。

亡き良人の位牌、また、一族の誰彼と、数限りなく本堂の壇に

ならんでゐる護国の英霊の前に、朝暮、陰膳かげぜんを参らせる時のほかは、めつたに襦うちかけ襦もすその裳を曳いてはいなかつた。

ゆうべも殆ど眠つていない。

かねて覚悟の日。

(こたびは生きて還りませぬ)

と門立つ子らに対しても云うべきことは平常に尽してある。この期ごにおいては、涙もないのである。

むしろその子らにも、生きて還らぬ部下たちにも、一椀の温かい汁でも——と彼女はつい今し方まで、下部しもべたちを指図し、自身も大おおくりや厨やに立ち働いて、水仕みずしの業わざをしていたのであつた。

先には、まだ灰暗ほのぐらいうちに、二千余騎の将士が、白い息を吐

いて、ここを発し、今また、正行以下が最後の別れを告げて立たんとするのであった。

——泣くまじ。

と思うほど、母の眼、子たちの眼、一族の人々の眼は、あやしき熱さにかすんだ。

見送る母の側には、久子をまん中にして、ことし十六の正秀まさひで、十四の正平まさひら、十一の朝成ともしげの三児が、立ち並んでいた。

「——では母上」

正行は、すこし頭を下げ、

「これより出立いでたちまする。父君の御遺訓、母うえが日常の御庭ていき訓くん、御旗みはたに生ひるかしてがえ翻ひるす日は今です。ふたたび、お膝の許に、

正行が身、生きては還りますまい。長いお愛しみ、死してもわすれませぬ。ははじゃびと母者人にも、ようようお年、この後は正行をお愛しみ下されたように、御自身のおからだを御いたわりくださいまし」
人々は皆、うなじ頸を垂れたが、久子は常と変りなく、

「はい」

うなずいて見せた。

正行はまた、

「これより吉野の御所に伺候して、よそながら今生のおん暇いとまを申しあげ、直ちに、賊軍のうちへ駆け入ります。弟正時は召しつれますが、正儀は御所より戻します。留守後々の事、正儀によう申してありますれば、お心づよく思し召されませ」

「そなたも、心おきのう」

列は正行を先にして、総門のほうへ進んで行つた。門の外に、馬のいななきや、かつかつと轡くつわのひびきが聞えた。

「これ、ここで。——大人しゅう、ここに居やい」

追いかけて、駈け出そうとする少年の正平や正秀を、久子は両手にひき寄せた。ここの水入らずな袂別のすむのを、さつきから待ちかまえていた僧衆や、下部らや、百姓の女房たちや、留守に残る将兵たちが、いちどにどつと、総門のほうへと、送りに雪崩なだれて行つたからである。

正秀、正平のふたりは、母のそばにこころ泳えていたが、まだ幼い朝成は、母の手をかくぐつて、

「わしも。わしも行く」

と、駈け出した。

それを追つて、

「あつ、和子様。和子様」

急いで抱き止めて戻つて来た若い郎党がある。四男の正秀と同年ぐらい。つい近頃、子供らの傳人もりとに抱えられたという小冠こかんじ者やである。

とりで寨の山の中腹に佇たたずんで、じつと、此方を眺めていた、蔵六の眼を突然愕かせたものは、その小冠者の姿だった。

親の眼である。遠くではあつたが、紛まぎれはない。それこそ彼がこの城郭じょうかくのうちに血眼ちまなこで求めている捕虜のわが子、小四郎

綱高であつた。

六

年暮くれもない、正月もない。

天日は晦くちく、人々はうつつだつた。

人に病のあるように、天地にも災厄があり、国体にも患いの時代がある。かかる有るまじき世をも超えなければ、真の国礎は万代にすわらぬものとみゆる——と時の民ぐさは啣かこつた。

年は明けた。日本じゅうの憂いの中に。

血ちなまぐさ腥い木枯らしの矢叫やたけびは、元日とても吹き荒すさんだ。低い

冬雲の乱流する下、葛城連峰かつらぎれんぽうから飛ぶ粉雪の果て、

「戦いくさは。——勝敗は？」

と、留守の東条の人々は、河内の野を、心配にみちた眼で、見まもっていた。

兄の正行が出陣の折、吉野の仮宮まで、行を共にして、そこから別れて城寨とりでへ歸つて来た三男の正儀は、戻るとすぐ、母の居間に姿を見せて、

「母うえ。お欣喜なされませ」

と、復命した。

正儀の伝えに依れば、後村上天皇には、正行が、よそながら今生の御いとま乞いにと伺候した心のうちを、疾とくお察しになつて、

冬風のふせぎも粗末な仮御所の階の下、間近まで、正行を召されて、御簾ぎよれんをさえかかげられ、

「朕ちんは汝こころを股肱こころとたのむぞ」

と、親しく仰せられたという。

「ありがたい、勿体もったいない、御諚ごじようではござりませぬか」

語りながら正儀が、鎧の袖を顔へ押当てて涙すると、母の久子も、この日頃、一しずくも見せなかった涙を、一度にはふりこぼして、

「勿体なや」

急いで膝を、吉野の仮宮のほうへ、正しく向けかえ、伏し拝んで、

「……そして、正行は」

「余りの畏れ多さに、兄は、何のお答えもよう申し得ませぬようでした。やや後ろに離れて、わたくしどもまで、涙にむせびつつ、俯目に兄者人のほうを見てありましたところ、母うえが着せてあげた赤地錦の小袖、萌黄緘の鎧、太刀のこじり、いつまでも、石のように、ひれ伏してありましたが、微かに顫いていたように見られました」

「欣しさに。……さこそ、さこそ」

大きな歡びに会うたびに、久子は、良人正成を胸によび起した。そして、心のうちで、

（かようにござりました。こういたしました）

と、在りし日の通りに、歡びを、また自分のつとめを、胸のうちで報告した。

何かまた、それとは反対に、子たちに落度があり、自分のつとめに欠けたと顧みられる節のある時も、

(ふつつかを致しました。これから心いたしまする)

と、胸に詫びることも、良人が世にある日の通りであつた。

ここに移り住むまでは、かんしんじ觀心寺にもいて、また、良人とは道どうけい

契うけいのふかい妙心寺の授じゅ翁おう和尚おしょうとも親しく、自然、彼女も信

仰あつに篤あつかつたが、有憂無憂うゆうむゆうの仏華ぶつげは後世ごせのながめであつた。修羅しゅら

の矢たけびを、厨くりやの外に聞き、六人の育兒、一族の融和、それか

ら着る物、焚たく物の欠乏などとも、年月長く闘つて、内助にかく

れきりながら、しかも強く、敵の矢風の中に立つよりも強く、生きて生きて生きぬいて来るまでには、世の常の菩提ぼだいのねがいとは異ちがうものがあつた。

彼女の胸に凝こつて今もかわらぬ根本のものは、やはり良人正成の満身にながれていたものであつた。ひとつ血の夫婦が、良人の世にあるうち、常に語かたい合つていたことは、この国に生れた幸さちであつた。無窮な国体のうえに生を保もつ安心であつた。大君の恩であつた。これも大御民おおみたらのひとりびとりぞ、と見まわす家庭と家の子らであつた。

久子は、正成に嫁してから、かねがねおぼろに抱いていた考えを、さらに慥しかと、信念づけられた。子をな生し、世が騒がしくなる

ほどに、またその信念は、よけい強められて行つた。

末子の朝成^{ともしげ}を生んだ翌年。延元^{えんげん}の元年五月。

湊川に戦死した良人の首級を、やがて敵方から送られ、その変り果てた面を、観心寺の一室に迎えて、仰ぎ見た時も、あのまま泣き絶え果ててもしまわずに、心と心とで、語りあうかの氣もちを抱き、生ける時の夫婦以上の誓いをも、その刹那^{せつな}ひそかに成し得た意志の力も、後に思えば、やはり生前良人から知らず知らず^う享けていた国本の大義に明らかな眼があいていたお蔭^{かげ}であつた。それと、武夫^{もののふ}の妻たる日頃の覚悟と、弥陀^{みだ}の御さとしての助けであつた。

「まさのり
正儀」

やがて静かに、久子は呼びかけた。この正月を迎えて、はたち二十歳となつた正儀のすがたをじつと見てである――

「一天の大君さまの御口ずから、臣下まさつらの正行へ、汝を股肱ここうとたのむぞと御諛ごじょうあそばされたことは、まこと正行のほまれ、亡き父君にも、御満足に在すらめとは思ふたが、深く思えば、この御国に、こうした畏れ多いことのあるつてよいものか。――お汝こともはや二十歳ぞや。父君の御遺訓、よも忘れはあるまいの。朝廷への御奉公にかけて、兄たちに劣るまいぞ。留守は、お汝ことが総大將、母は、どこまで家の母じや。つわもの士たちの指揮、心がまえ、忠義一すじの鍛え、皆お汝ことが軍配と徳にあること。きようよりはなお、心して賜たも。その身を、父君や兄達の亡き後の三世の忠義

に備えておかれよ」

「わかりました。よくわかつておりまする」

正儀まさのりも咽むせび泣き、彼の母も、ほかに従者や幼い者がいなくなつたせいか、いつになくしばしば袖口まぶたを瞼まぶたにあてた。

正儀は、母のそのすがたが、巨おおきな慈愛の樹のようにながめられた。

その大樹は、年経るごとに、枝を伐られ、葉をふるい落されてゆく。良人おととの正成、良人の弟正氏、また、里方さとかたの兄南江正忠だと、次々に戦死し、一族遠縁の人々までも、それからそれへと梢こずえから去つて行つた。

右の枝を伐られ、左の力を挽もがれても、樹は傷む顔も見せない。

老いのつかれも口に出さない。きつと来る春を信じて大地に立ち
聳そびえている。

だが——さすがに。

二十余年を積んで良人に恥じぬ若人と育てあげた正行と正時を、
還らぬ戦場へ送つてからは、正儀まさのりには、母の年輪としわが改めてかぞ
えられた。傷いたしと哭なかぬ樹のすがたに、自分のほうが泣けて来て
たまらなかつた。

そんな一日のうちの一刻ひとときもあつたが、薨しとみを出て、東条の山か
ら、雪もよいの河内方面の空を見やれば、矢たけびか、枯野の風
か、びゅーつ、びゅーつと、きのうもきょうも、天地は灰色の晦か
冥いめいにつつまれていた。

「どうあろう？ 戦の様子は」

「兄たちは」——と思いはすぐ遠く駆ける。

るすとりで

留守寨の兵たちも、総門の方に、馬のいなくのを聞けば、
「すわ。お使いぞ」

と、刻々、待ちうけている前線からの伝令と見て、われがちに
駆け出した。

七

誰の眼も、眸の先に光りものがちらついて、気が逆上^{あが}ったように、
血走っていた。

夜来からの城寨じょうさいの混雜は、六日の明け方までつづいていた。味方の敗戦、それから四条しじょうの全滅、一族数々の人の名が、討死討死と、次々にここへ聞えて来たのである。

折弓や血刀を杖に、血と泥にまみれた虫の息で、這うが如く、引揚げて来た味方の者たちから報じられたのであった。

「騒いではなりません」

正儀の制止にも余つて、城郭内じょうかくないの躁ぎさわがしずまらないので、明け方には、遂に、兵の屯たむろにはめつたに姿を見せたことのない久子自身が出て行つて、何かの指揮や処置に、正儀を励ましている様子であつた。

出てゆく折、末子の朝成ともしげが、眼をさまして、母の姿を追いか

けたので、

「小綱、和子わこを見ていて賜たまも」

傳役もりやくの小冠者こかんじやにあずけて行つた。

「和子様、和子様、さ、狩衣かりぎぬを召しませ。おかぜをひきますぞ。

そして小綱と、きょうも竹山たけやまへ攀よじて、遊びましょう。よい竹

伐つて、竹馬を作りましょう」

あやしすかしながら、狩衣かりぎぬを着せて、薮しとみえんの縁から降りかけた

時だった。

「小四郎っ」

ふいに、物陰ものかげから躍り出て、漆間蔵六うるしまぞうが前に立つた。

「あつ、父上」

愕然と、立ち竦む子の処へとびかかつて、蔵六は、彼を大地へ組み伏せた。

「お、おつ、おのれは」

骨肉への憤りは、自分が自分へ怒るように残酷の度も見失つて、ぐいぐい喉^{のど}をしめつけていた。けれど云わんとすることは、感情の火に、口ばかり渴いて出ないのである。

その父の形相にひさかえて、

「何をなさるんです。父上、お怒りのわけを承りましょう」

凍^いてた大地へ、顔をこづかれていながら、小綱の面^{おもて}はむしろ憎いほど落着いていた。

子の落着いている眼を見ると、蔵六は、はつと親に回った。大

人げないことを自省した。殊に、無意識に右手に抜いていた脇差に気づいて、それをどうする気だったろうと、慄然りっぜんとした。

ゆるむ父の手を押しいただきながら、小綱は身を起して、

「いや、お怒りのわけは、解りました。より先に、私が、楠木家に随身ずいしんして、なぜ武士の道をたがえたかのようなことをしたか、仔細しさいを申し上げましょう」

大地へ、坐り直して云った。

「父上も、どうか、落着いて、お坐りください」

「こうか。——さッ申せ、聞こうっ」

蔵六は、肩も膝も四角に尖とがらして坐った。父親たるの顔を厳と示した。

「あれは、去年の十月中旬なかばでした。浪華ななわの御合戦の際、暗夜といえ、不覚にも、私は楠木勢のために、擒人とりことなりました。けれど、恥とは一時の思いでした。今では、よくぞ擒人とりこになつて、真の人の道と、武士の道を、踏み迷わずにすんだと、天恩に謝しております」

「な、なんだと」

「しまいまでお聞き下さい。あの折の合戦は、足利方の惨敗でした。四天王寺のあたりから駈け崩され、ふかい暗夜を、押しもまれて、退く途みちすながらも、しばしばふいの伏勢に襲われ、渡辺橋の断崖から、淀川の早瀬へ、墜ちた者が無数でした。私もその中の一人で、深い淵ふちへ墜おちこみ、寒さは寒し、重い具足や身み拵ごしらえ、

すんでに凍え溺れるかと思つたところを、繩梯子にすがれと、断崖の上へ、助け上げられたのであります。——味方ではありませんせん、楠木方のほうにです」

「そして」

「見ると、河に墜入つて、救われた足利方の兵、百二、三十名もおりまじらうか。一団になつて、陣所へ曳かれ、さては首切られるかと、覚悟定めていましたところ、いとうら若い大将、楠木河内守正行まさつら殿でした。下知げちなされて、幾力所にも、焚火たきびを焚かせ、さて、怪訝いぶかる敵のわれわれへ云われるには——（あわれや兵ばら、武士は相見互いと云い習ならわすぞ。勝つも敗けるも時の運なれ。賊軍とはいえ、主のために働いてのこと、妻もあらむ、子も

あらむ、はやはや都に帰れ、縁あらばまた、戦場にてまみえんもの（を）と、こう仰せられまして、火にあたれ、肌着を乾せ、薬はいかに、粥かゆを喰べよと、傷負ておいには馬まで下されて、放たれたのでござります」

「ふーむ……」

「泣きました。命知らずの強者輩つわものばらも、さすがは正成公の御嫡ごちやく子よと、泣かぬ擒人とりことしてはなかったのです。そして半分は、京都へさして帰りましたが、残る半数は、その場で降伏を誓い、正行様の旗本で働きたいと云い出しました。私も、その一名でした」

「なに、降伏したのか。降伏を」

「はい」

「恥を知れ。この父や一族どもの、御主人を裏切つて、おのれ、二君にまみえる気でか」

「いえ、父上」

小綱は、^{さへぎ}遮つて云つた。

「そのことについては、私も苦しみました。けれど楠木様に召仕われてからは、^{あやま}過りてわが武士道と、さらりと悩みも解けました。

——二君とは誰と誰。この日^{ひの}本には、君たる御方は、主上御一人しかないはずであります。足利殿は、また足利殿に加担の衆は、そのこの根本の理に^{くろ}晦うござります。故に、彼等の戦は乱です。名は賊子^{ぞくし}です。——父上がもしここへ来られなかったら、いつか私は、父上を賊徒の陣から救い出しにゆく考えでおりました。武^{ものの}

夫ふの家に生れて、武夫の道をふみはずし、賊の汚名をきて朽ちては、口惜しゆうはござりませぬか」

八

「……………」

蔵六は、大きな呻うめきばかりして、いつまで、胸に拱くんだ腕を解こうともしなかった。

——その時、ふと気づくと。

城寨とりでの山々は急に湖のような寂寥しじまになっていた。跫あし音おともさせぬ静かな一すじの列が、水の流るるように、総門のほうからここ

へ上つて来るのが見えた。

その列の先に見えた人は、葛城かつらぎの峰の雪よりも真白もふくい喪服もふくを着、白木の台に白おおいい覆布おおいをかけたのを捧たげていた。覆布おおいの下には、血にそんだ鎧よろいの草摺くさずりの片袖と、血糊のりによごれた黒髪とが載のせられてあつた。

今し方、戦場から拾まわれて来た正行まさつらと、弟正時の遺物かたみかと思われた。

喪服して、それを出迎え、捧持たしてくる女性おんなは、いうまでもなくその正行、正時を生んだ母なる人である。

正儀まさのり、正秀、正平、留守の兄弟たちも、俯向うつむきがちに母に従ひさこつて来た。従者や老臣は涙を拭ぬぐうていたが、久子の面にも、兄弟

たちの眼にも、涙はなかった。むしろ次々に自分らもやがて赴く殉国の日を思つて、強烈な意志と誓いとを、悲痛な眉のかげに湛^{たた}えていた。

「母さま。——何？ 何？ それ何？」

いきなり駈け寄つて行つた末子の朝成は、母の喪服へ縋^{すが}つて訊ねた。

「お兄様たちが、お帰りになつたのじゃ。大人しゅうそなたも来やれ」

「どこへ。どこへですか。母さま」

「お父君が、いつもお在^いで遊ばすお部屋に。——そして、湊川でおかれ遊ばした叔父様も、みな揃うて、天子様のほうに向い、

なお、残る子らには、正儀がおります。正秀もひかえております。また、正平や朝成も成人して、御所のお護りに参りますと、おこたえ申しあげるのじや。そなたも席に欠けてよいものか。母に従うて来やい」

「あい」

朝成は、よく解った顔して、大きく頷いた。

「……………」

屋の内深くへ、すべての人々がみなかくれた後も、まだ解らぬ面持おももちして見送っていたのは漆間蔵六であつた。

だが、そのうちに突然、両手で顔を蔽うと、彼は声をあげて泣き出した。天を恐れ地へ詫どうごくびるように慟うな哭した。

そしていきなり小綱の手を固く握りしめ、

「この眼に、この眼に、わしは初めて、ほんとうの人を見た。いや神を見た、ひのもと日本という国を見た。——小四郎、さッ急ごう、京都へだ」

「いやです。私は帰りません。正儀様の御旗みはたの下に踏みとどまります」

「なにまたすぐに帰って来るのだ。妻、おまえの兄弟たち、縁者の輩ともがら、ひとりとして賊名の中に見捨ててよいものか。漆間蔵六とて、語らいあえば四、五十名の士つわものは連れて来られよう。そのまに正儀様の御旗も、他へお移しになろうが、何処までも馳せ参ずる所存だ」

「では、父上も」

「礼をいう、小四郎、よう導^{みちび}いてくれた。そうだ、そちを連れては、京都の世間がうるさい。わしひとりで行つて来る。子に手を引かれるのは恥かしいが、お味方に参じた節は、お取^{とり}做^なしを頼むぞよ」

観心寺、龍泉寺、^{あまのざんこんごうじ}天野山金剛寺、^{みね}峰谷々の^{とりで}寨寺で、護国の鐘^{かね}が鳴りひびいた。正行、正時の霊を弔う鐘であつた。折から降り出した満天の散^{さん}華^げは、白い春の雪と化^なつて――。

青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「主婦之友」

1940（昭和15）年1月号

入力：川山隆

校正：雪森

2014年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本名婦伝

大楠公夫人

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>